九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

朝鮮児童文学の研究序論

金，成妍
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/16027

出版情報：Comparatio. 7, pp.26-37, 2003-04-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

朝鮮児童文学の研究序論

金　成妍

はじめに

1876年2月の日朝修好条規から1910年8月の日朝併合までの約40年間を朝鮮の開化期という[1]。開化期を通して、鎖国的状態にあった朝鮮は外部に開かれていく経緯を辿る。朝鮮に「児童」が誕生したのもこの開化期であるといえる。伝統的な社会との断絶が強引になされ、「近代」的要素が取り入られる過渡期に朝鮮の「児童」は誕生したのである。「開化」「近代」の到来という歴史的な状況のなかで、「児童」観はどのような変遷過程を経て確立されたか。本稿では、朝鮮の「開化」「近代」と「児童」という観念の相関関係、そして文学というジャンルに「児童」観が反映される経緯を考察することによって、近代朝鮮において「児童」ひいては「児童文学」の誕生が意味するものについて考えていきたい。

1.　開化期を迎えた朝鮮

(1)「少年」の登場

朝鮮の開化期、新文化運動に乗って出版界にも新文学運動が盛んになる。1910年代に発行された雑誌は約35種に上っているが、児童を読者とした雑誌は「少年韓半島」(1906～1907)のみであった。梁在謇、趙兼応、李仁稙、李海朝によって発刊され、通巻6号で終刊となった「少年韓半島」は、「新学問紹介の児童教育誌」[2]であった。知識伝達をその主な目的とした点から開化期の教科書と変わりがないものといえる。また、「少年韓半島」が廃刊された翌年、総合雑誌を標榜した「少年」が創刊される。1908年11月1日に創刊され1911年5月4巻2号で廃刊された「少年」誌は、総計23号を刊行した総合雑誌である。兄・崔昌善を発行人にして「少年」を出版した崔南善(1890～1957)は、1904年、15歳で皇室留学生に選ばれ東京府立第一中学に入学、1906年には現早稲田大学の高師部地理歴史科に入るが、1907年に中退する。帰国後、「少年」創刊に際して崔南善は次のように述べている。

> 日本に暫くいた時、日本には児童を相手にする雑誌が数種あって、あれをまねしてやってみようかと思って始めたが、日本とは事情が違って児童を相手にいろんな面白い興味ある雑誌はできなくなって、しまいには「少年」とは反対に成人の一般啓蒙誌になってしまったが、当時の事情では仕方がないことであった[3]。

ここには、崔南善が日本の児童文学に刺激されて「少年」を創刊したことが語られている。さらに「少年」創刊号の「編輯室通奇」欄には、

> 軽薄なことを主張して児童の好奇心と歓意に迎合し、様々な懸賞と抽籤を行なって白紙のような児心に虚欲と僥倖心を印することは外国雑誌の通弊なのだ。これは我が同人が外国にいる時深く慨嘆したところであり奨励上、やむを得ないとき以外は一切懸賞はしない。(略) この誌上には少年の文芸を奨励するため「少年文壇」を設置したので、所感や諸経歴などを真実に簡明にありのままのことを書いて送ってください[4]。

と述べている。崔南善は「少年」誌の創刊を、「少年文芸を奨励するための少年文壇の設置」として認識していたのである。また「少年」誌に見られる特徴に、新しい用語の遣い方がある。崔南善は「少年」誌を通して、「児童」「童謡」「少年」などの当時としては「新しい」文学用語を遣っている。コン・ボクヨンの「近代児童文学形成過程研究」(ヨンセ大学、1999)によると、近代以前には「児」「童」「幼」という言葉が「幼い人」という意味で遣われていたが、これは「成人」に相対する意味での遣い方であった。「児(ア)」と「童(ドン)」という二つの言葉が、開化期以降「児童(アドン)」という一つの言葉になった。日本語の「児童(ジドウ)」の導入によることと考えられる。「児童文学」という用語も崔南善によって1914年「아이들보이(子供達ボイ)」創刊号で初めて遣われている。

「少年」を創刊した崔南善の意図と意欲は、雑誌の冒頭にある創刊趣旨に見ることができる。

> 我が大韓を少年の国にせよ。そのために責任を持って彼らを指導せよ。(略) 本誌は此の責任を全うできる活動的進取的発明的大国民を養成するために出来た明星である。

崔南善は、上記のような「少年」創刊の意図を毎巻雑誌の冒頭に掲げている。「少年の国」を建設するために、「大国民を養成」すること、つまり新朝鮮建立への意志を唱えているのである。崔南善が志向した理念であり思想である「少年中心主義」は作品にも表れている。以下は、朝鮮で最初の「近代的新体詩」として知られている「海より少年へ」[5]の一部分である。

四

ザブン、ザブン、ザブン
小さい山に寄りかかり、
猫の額のような島、狭い土地を持って、
その中で威張りながら、

四

텨……ㄹ썩, 텨……ㄹ썩, 텩, 쏴……아,
됴고만 山모를 依支하거나,
됴ㅅ쌀갓흔 덕은섬, 손ㅅ벽만한 땅을 가디고,
고속에 잇서서, 영악한 테를,

自分だけが偉いと思っている者、	부리면서, 나혼댜 거룩하다 하난 者,
こっちに出て来て、僕を見てごらん	이리듐 오나라, 나를 보아라.
ザブン、ザブン、ザブン、ザバーン	텨……ㄹ썩, 텨……ㄹ썩, 텩, 튜르룽, 콰.

五	五
ザブン、ザブン、ザブン	텨……ㄹ썩, 텨……ㄹ썩, 텩, 쏴……아,
僕の友になれる者は一つある、	나의 짝짜될 이는 하나 잇도다.
大きくて長く、広くひろがっているあの青い空。	크고 길고, 널으게 뒤덥은 바뎌 푸른 하날,
あれは僕たちと変わらない、	뎌것은 우리와 틀님이 업서,
どんな争いも喧嘩も、何の汚れもない。	뎍은 是非 뎍은쌈 온갖 모든 더러운것 업도다.
こんな世の中、こんな人間たちとは違って、	됴따위 世上에 됴사람, 렴텨
ザブン、ザブン、ザブン、ザバーン	텨……ㄹ썩, 텨……ㄹ썩, 텩, 튜르룽, 콰.

六	六
ザブン、ザブン、ザブン	텨……ㄹ썩, 텨……ㄹ썩, 텩, 쏴……아,
この世の中、この人間たち、みんな嫌だが、	뎌 世上 뎌사람 모다 미우나,
このなかでたった一つ愛するものがある、	그中에서 똑하나 사랑하난 일이 잇스니,
勇気ある純精な少年たちが、	膽크고 純情한 少年輩들이,
人形のように、かわいく、僕のもとにやって来て抱かれる。	才弄텨럼, 貴엽게 나의품에 와서 안김이로다.
こっちにお出で　少年たちよ　キスしてあげる。	오나라 少年輩 입맛텨듀마.
ザブン、ザブン、ザブン、ザバーン	텨……ㄹ썩, 텨……ㄹ썩, 텩, 튜르룽, 콰.

7行6連で、同一の律格を繰り返している。擬音語が各連の最初と最後に来ている形式で、読点を使った斬新な朝鮮語の使用法である。全体的に、海が立ち上がって雄弁を弄しているような語り口であり、また、少年を賛美する一方、擬音語と反復技巧によって旧時代の打破を律動的に表現している。相互のコミュニケーションの形ではなく、一体化した海と作者が一方的にメッセージを伝えているような形をとっている。まるで少年に向かって、改革の渇望を噴出しているようである。

「少年」誌には創作「海より少年へ」の他に、翻訳作品「ロシアのピョートル大帝」や「ナポレオン皇帝」、「巨人国漂流記」や「ロビンソン漂流記」、「イソップ物語」などが掲載され、殆どが英雄伝記と海洋冒険を主としている。ちなみに崔南善は自分の思想を「海事思想」と称しているが、これらには教訓性が強く、理念伝達を目的とする彼の啓蒙思想を窺うことができる。また、創刊号に掲載した「イソップ物語」に対しては、「これは毎号、四、五篇抄訳して、最後に有名な内外教育家の解説をつけておく。読む人がその興味深い構想に触れ、また神秘的な寓意も理解し、分かりやすい言葉の中に、深遠な知恵のあることを悟り、その結果、読む人の世を処していく上に役立つことを願う」と述べ、物語を語

る前に、その目的を明記している。物語「風と太陽」の最後には、「学ぶこと」と「教えること」という見出しを加え、短い物語の中に「深遠な知恵のあること」を少年が考え、学ぶことを望んでいる。このような教育性は、崔南善が持っていた啓蒙意志の産物であり、当時隆盛していた国権の回復を提唱しつつ展開した当時の盛んな教育運動の気運とも呼応したものと考えられる。

（2）「少年」の意義

日本の児童文学に刺激されたという崔南善の創刊の動機と新文学用語の使用、総合雑誌という形式などによって「少年」誌は朝鮮児童文学の起源に位置づけられる。李在徹は「最初の児童誌は新文学の起源を成した「少年」誌である[6]」といい、任元宰も「六堂少年研究」（明知大学、1983）において「少年」誌を「現代児童文学史の起源」として位置づけている。この点にふれてコン・ボクヨンも「児童文学に対する本格的な論議は1908年崔南善が主宰して創刊した総合雑誌「少年」から出発するしかない」と説く。

ところが、「児童文学」を目指して出発したとはいえ、「少年」誌は結局崔南善が自ら語っているように、「一般の啓蒙誌」に止まってしまった。その錯誤は、雑誌の文体にも表れている。「少年」誌は、朝鮮語（ハングル）と漢字を混交した文語体となっている。また「―イラ」「―ドラ」（日本語の「―せよ」のようなニュアンス）などの文語表現を使っているが、これは当時の新聞記事によく使われていた表記法である[7]。つまり、「少年」誌は大人を対象としていた当時の新聞や文学作品と比べたとき、文体上における差異がなく、読み方もつけないまま漢字を使っており、子どもに対する文体使用上の配慮が全く見当たらない。「少年」誌における「少年」とは、勇気と力を内在している無限な可能性として象徴されている。少年のイメージを海と空に表象し、少年に対する期待を海に求め「我が大韓を少年の国にせよ」と主張しているのである。ここでの「少年」とは、決して「子ども」を意味しているとは言えない。子どもを含めた青年、若者に近い意味で使われている。

「少年」を発刊した当時、崔南善は18歳の少年であり青年であった。そして、「少年」誌を通して、自分と、読者である少年を同一視している向きがある。金允植は、「少年」誌の特性が「六堂崔南善という一個人の理念がいかに民族という全体を高揚させることができたかという問題[8]」にあると説く。趙容萬の『六堂崔南善』でも「少年」誌が崔南善の単独執筆による個人誌であったことが指摘されている。ここで注目しておきたいのは、個人誌が、作家の思想を背景として現実に対する作家の認識を強く反映する特質をもっているということである。すなわち、「少年」誌には崔南善の「少年中心主義」「海事思想」が雑誌全般に一貫しているのである。ここでの「少年」とは、未来の担い手として、新しい国家を創造するのが可能な人材として存在している。国家を構成する中心存在を「大人」から「若者」に移し、それを「少年」と称して、「少年」という特殊な領域を作り始めたのである。このような崔南善の改革的な意志が、「大人」から「子ども」を分離させようとする

自覚までに至っていなかったことが、「少年」誌が一「般啓蒙誌」に止まった原因となると考えられる。

「少年」誌が「児童文学」の成立には及ばなかったとはいうものの、本誌が当時の朝鮮に及ぼした影響は意義深いものであった。1910年8月22日の「日朝併合条約」から1919年の3・1独立運動にかけて、朝鮮で「自存自強」を成しとげようとした抗日運動が数多く組織される。そのなかに、「少年運動」というレジスタンスがあった。金正義は、少年運動期を「第一期（1876～1909）：開化思想を通じた少年愛好・啓蒙期、第二期（1910～1918）：少年運動の力量蓄積期、第三期（1919～1923）：近代少年運動の発生期、第四期（1924～1930）：近代少年運動の全盛期[9]」と区分している。すなわち、「少年愛好・啓蒙期」となる1908年に刊行された「少年」誌は、朝鮮における「少年運動」の導火線的な役割を果たしたといえる。崔南善が提唱した「少年中心主義」は、少年運動の基本理念となったのである。

2．朝鮮に登場した「子ども」

（1）天道教と「開闢」

3・1独立運動の発生後、日本帝国は朝鮮半島に対する統治制度の方針を、武断統治から文化統治に転換する。文化統治の実施によって朝鮮には再び朝鮮語の新聞や雑誌が登場、文化運動が起こるようになる。その勢いは、「開闢[10]」誌（1920年6月25日）の誕生につながっている。「開闢」は天道教の機関紙であるが、宗教色は薄く、新文化運動を展開しながら民衆を啓蒙し、民族意志を鼓舞させることをその目的とする「民衆雑誌」となった。

「開闢」創刊号には、「笑話」と「寓話」という物語が掲載されている。物語の最後には「少年」誌のような「学ぶこと」「教えること」といった見出しは付いていないが、「お互いに話し合って分かち合うことが、裁判をして全部失うことよりマシだ」などの、教訓的な物語の要約を一つずつ付している。根本に教訓性と啓蒙性を有していることは「少年」と変わりがないのである。そして「仲間へ」[11]という作品には、「仲間よ。自我主義に目覚めなさい。自力主義を身につけなさい。生の要路に進みなさい。しっかりして目指したところだけを注視しなさい。」とあり、「少年」に勇気を持って前に進むことを唱えている。いうまでもなく、崔南善の「少年」から始まった「少年中心主義」を基底においた「少年運動」的傾向の作品である。こうして、「開闢」創刊号は崔南善が樹立した「少年中心主義」の延長線上にあったと考察される。

ところが、「開闢」2号には「児童解放論」を主張する次のような金小春の評論が載っている。

長幼有序の弊害を除去しなければいけない。第一、幼年に対する呼称を変えるべき

である。冗談でも〈このやろう〉〈こいつ〉というような言葉は絶対使わないようにすべきである。(中略) 要するに、第一幼児も人間である。2千万の兄弟のなかの一人であり、世界16億万人のなかの一人であり、将来、大きな運命を開拓していく一人なので、彼らの人格を認めなければいけない。このような精神を我々が身に付けると長幼有序の弊害によるあらゆる悪習を直すことができると同時に、半島の数百万の幼い男女は因習から解放されるであろう。最近、女性解放論が盛んであるにもかかわらず、児童解放論はなぜ聞かれないのか[12]。(後略)

1920年になり、ようやく朝鮮に、「人格」を認められた「児童」が登場したのである。そして金小春の主張から1ヶ月後である1920年8月25日の「開闢」3号に、「子どもの歌(灯をともす人)」という作品がザンムル[13]の名前で発表された。海外の作品を翻訳した児童詩で題目は「灯をともす人」であるが、方定煥は「어린이노래 (子どもの歌)」というタイトルの方を前に出している。「オリニ[14] (子ども)」という呼称が定着するにいたるのがこの時期からであった。この「オリニ」という言葉の定着は同時に児童観の確立に密接に結びついている。というのは、開化期、「少年」「児童」が文学作品の中で用いられたとしてもそれは児童という固有の観念が与えられたことを意味していかなかったからである。

また天道教の機関紙である「開闢」を通して「児童解放論」が登場していることは、朝鮮における児童の誕生と天道教の教理との必然的な関係を示唆するものでもある。天道教の理念は、自らの児童観と天道教徒としての立場と童話観を語る方定煥の次のような文章にも表れている。

私は子どもが好きである。なかでも言葉を覚え始めた五、六歳頃の子どもを一番敬愛している。(中略) かわいい天使、人乃天の天使、新しい世界の天道教の新しい人材になって地上天国の建設に努める我が教団の幼い友だちに、幼少の頃から、詩人である頃から、まだ物欲の虜になる前から美しい信仰生活を賛美してほしい。永遠の天使になってほしいのである。常にこの思いを忘れず、芸術に邁進してほしいのである。(中略) 弟や妹がある人よ、子どもを育てている親よ、子どもを教えている先生達よ、お願いだから、かわいい幼い詩人にお金をあげる前に、お菓子をあげる前に、できるだけ、機会があるたびに、神聖な童話を聞かせてください。たびたび、頻繁に。(後略)[15]

(日本東京池袋鶏林舎にて)

方定煥 (バン・ジョンファン) は、小波 (ソパ) という号で知られている朝鮮児童文学の先駆的存在である。天道教の第3世教祖である孫秉熙 (ソン・ビョンヒ) の三女の婿で、天道教が主導していた開闢社の各種出版活動にも活発に関与していた。天道教の財政的支援と人乃天思想が彼の背後にはあったわけである。「人乃天思想」とは、「人是天天是人人外無天天外無人」なので「人是天事人如天」という意味の、天道教の基本理念である。さ

らに天道教の経典には次のような節が加えられている。

> 私は婦人と子どもの話でも学ぶことがあれば学び、尊敬することがあれば尊敬する。自分の子と嫁を大事にし、召使を自分の子どものように大事にし、禽獣でも大事にし、木や芽を折らないで、親のいうことをよく聞きながら笑って、幼い子どもを殴らないで泣かせないで下さい。子どもも神様を祭っているので、子どもを打つことは神様を打つことになって神様に逆らうことになる[16]。

方定煥は、このような「児童尊重」をふまえた「人間尊重」「万人平等」を基本理念としている天道教の「人乃天思想」を基盤にして、「童心天使主義」を志向したのである。つまり、天道教の「人乃天思想」があったからこそ、金小春の「児童解放論」も、方定煥の「児童天使主義」も可能だったと考えられる。更に看過できないことは、方定煥の日本への留学経験である。上記の「子どもの歌」を翻訳したとき、方定煥は東京に滞在中であった。1920年8月から東洋大学の哲学科の聴講生になる。『方定煥文集』によると、「日本東洋大学哲学科に学籍を置き、児童文学（芸術）と児童心理学を研修した」という。またこの時期方定煥は、開闢社の東京特派員として日本で活動する一方、天道教青年会の東京支部の会長をつとめ、ソウルと東京で活発な活動をしていた。1922年3月30日には東洋大学を退学して帰国、天道教少年会の創立1周年を記念して5月1日を第1回「子どもの日」に制定する。

当時の「東亜日報」に掲載された「子どもの日の宣言文[17]」をみると、「幼い人をだまさないで下さい。幼い人をいつもそばにおいてよく話しかけてください。幼い人に敬語を使っていつもやさしくしてください。」などの、児童の人権を高揚させるための事項が記されている。そして「早く結婚させようとしないで人間らしく接してください」と明記して、既存社会の早婚風習に反対する立場をとっている。

（2）セクトン会と「어린이」

少年会の組織、「子どもの日」の制定など、天道教による「児童解放」の声が高まっていた1923年3月、より組織的な児童問題研究団体を求めて「セクトン会」が創立される。東京、方定煥の下宿先で第1回の会合が開かれて、5月1日に発足式をもつ。東京でセクトン会の発足式が行なわれていたとき、朝鮮のソウルでは「朝鮮少年運動協会」の主催で「子どもの日」の行事が同時に行なわれた。「子どもの日」の行事はすでに1年前から始まっていたが、この年からは天道教的な運動ではなく、全国民的な動きに発展したところに大きな意味がある。「子どもの日」の宣言文には「少年運動の基礎条件」とあって、「子どもを在来の倫理的圧迫から解放し、彼らに対して完全な人格的礼遇を行なうべきこと。子どもを経済的圧迫から解放して満14歳以下の子どもに対する無償または有償の労働を廃すべき

こと。子ども自身が静かに学び楽しく遊べる各様の家庭または社会的施設を作らしめること[18]」の三つの条項を掲げている。そして当日配布したビラ[19]には、大人と子どもに求める事項をそれぞれ提示している。大人には「子どもに対する敬語の使用」を勧告しながら、「大宇宙の脳神経の末梢は年寄りにあるのではなく若者にあるのではなく唯一子どもにあることをいつも考えてください」と付け加えている。そして子どもには「早起き」を奨励し、落書きやガラス投棄の禁止、電車内での席譲りなど、日常生活で実践すべき項目を具体的に提示している。「児童解放」を主張する一方、子どもの道徳性・倫理性を高揚させると同時に、「早起き」や健全な遊びを奨励することによって子どもを健康に育てようとした「朝鮮少年運動協会」の趣旨が読み取れる項目である。

次はセクトン会の性格について述べた奏長燮の文章である。

> わが「セクトン会」は普通の研究団体でなくレジスタンス的性格を多分に内包した団体だと考えてきた。周知のことであるが、レジスタンスという言葉には抵抗という意味のほかに占領された地域の民衆が地下運動によって占領者に抵抗するという意味がある。われわれは多方面でこれを試みたのではなかったろうか。
> そのほかの一つに、われわれが1923年9月に全国少年指導者大会を招集して4、5日にわたって講習会をもった事実がある。「オリニ」誌を通しての活動以外は、この行事がわれわれのしてきたすべての行事の中でもっとも重要な意義をもつものだったと私は考える。なぜならば、われわれはその場で、地下活動的なわれわれの根本意図と指導方法とを二百名にものぼる少年指導者に伝達したし、その指導方法は継続して今日までも伝達されたであろうと考えられるからである[20]。

奏長燮はセクトン会のレジスタンス的性格を、「占領された地域の民衆が地下運動によって占領者に抵抗するという意味」と説く。崔南善の「少年」をその起源とした「少年運動」が、セクトン会という組織に体系化されたといえる。児童の人権を主張する「児童解放論」によって児童特有の領域が構築され、それが「子ども」の誕生を促したのである。そして、子どもに対する指導の傍ら子どもに相応しい文学の場を求め、雑誌「어린이」が登場するにいたる。

「어린이（以下オリニ）」は1923年3月開闢社から創刊され、1934年7月に第12巻7号（通巻122号）で停刊。解放後1948年5月に一時復刊されるが、1949年12月に通巻137号で終刊された朝鮮における最初の児童文学総合雑誌である。「オリニ」創刊に際して、当時東京に滞在していた方定煥は京城（現ソウル）の趙正浩宛に次のような書簡を出している。

> 今の学校は既成社会における一定の約束の下で必要な人物を製造するほか、何の理想も計画もありません。子どもは決して親のものになるために生まれてきたのではな

いし、さらに既成社会の注文品になるためでもありません。彼らはりっぱな一人の人間として生まれてきたのです。一人一人自分なりに独特な個人になっていくでしょう。（中略）少年運動に励む出発をここにおいた私はこれからの少年雑誌「オリニ」に対する態度もこうするつもりです。「オリニ」には修身、講話のような教訓談や修養談は一切入れないようにしなければなりません。子どもたち自身の音信、子どもたち自身の作文、談話または童話、童謡、少年小説。これで十分です。そのなかで笑って泣いて遊んで歌って、だんだん大きくなっていけばそれで十分です[21]。

「オリニ」誌の創刊が「少年運動」の出発であることを明記し[22]、既成社会と学校を批判しながら「教訓談や修養談は一切入れないようにしなければなりません」という意志を表明している。子どもたち自身による作文、談話または童話、童謡、少年小説を奨励する、いわば「自由教育」を主張している。方定煥の「自由教育思想」については、彼の日本留学体験と関連させて考えざるを得ない。雑誌「芸術自由教育」（1921年1月）が創刊されるなど、北原白秋による「自由教育運動」興隆の最中にあった日本を方定煥は体験していたからである。日本に隆盛していた「自由教育運動」の波に乗りながら、天道教の理念を基盤にした自分なりの思想を確立したと推測される。

方定煥は「オリニ」創刊号のモットーに、

鳥のように花のように小さくてかわいい唇で、天真爛漫に歌う歌、それは自然の声であり、天の声です。（略）平和で自由な天の国！それは我が子どもの国です。我らはいつまでもこの天の国を汚してはいけないし、この世の中の人々がみんなこの清らかな国に住めるように我が国を広げなければいけません。この二つの仕事を果たすために出来上がったものが「オリニ」です。[23]

と、子どもを称揚し、「童心天使主義」と同時に「子どもの国」を志向している。崔南善が「少年」誌において提唱した「少年の国」が、方定煥にいたって「子どもの国」となった。崔南善の「少年」とは、新国家を建立し得る「人材」たらしめる「若者」を意味するものであった。ところが、方定煥が中心となったセクトン会は「大宇宙の脳神経の末梢は年寄りにあるのではなく若者にあるのではなく唯一子どもにある」と主張する。ここには、「若者」から完全に分離されて固有の意味づけが与えられた「子ども」が存在するのである。しかし、道徳性の高揚と同時に「早起き」と「遊び」などによる児童の体力鍛錬に励む「少年運動」の根底には、「少年」誌と変わらない、「人材育成」という意味が内包されていると考えられる。

おわりに

本稿では、今後の研究に向かう序説として、「少年」「開闢」「어린이」といった雑誌をテキストとした朝鮮児童文学の創成期を辿ってみた。いずれも現実と噛み合った思想やイデオロギーが色濃く現れていたが、これは文学が社会の構成物であり歴史的な相互関係の中で発生したことを意味するものである。日本帝国占領下と天道教思想に囲まれた状況は、児童文学の形成と内容に大きな枠組みを嵌めこむものであった。本稿の最後に、「オリニ」誌に掲載された作品の類型について考えてみたい。

李正錫の「「オリニ」誌に現れた児童文学様相研究[24]」の統計によると、「オリニ」誌に掲載された文学作品は総843編で、非文学作品は、実話類、教養文類、教育文類、論説類、感想文類などに分類され、総数1017編となる。文学作品843編のうち、童謡の掲載数は273編で最も多く、次に外国童話（143作）、そして伝来童話（93作）の順となる。また、李正錫は、1923年から1925年までを「オリニ」誌の「創刊自立期」と見て、「この時期は伝来童話、童謡、改作・翻案童話などが比較的に多く掲載された時期である」といい、「少年会を活性化させ、児童文化運動を積極的に推進した時期であった」と述べている。

「オリニ」誌に掲載された翻案作品のなかには、日本の少年雑誌に掲載されたものを翻訳して載せたものもあった。これに対する読者の疑問に、方定煥は、「皆さんに有益なものなら、どこの国の雑誌や新聞に構わず、一生懸命翻訳し紹介するつもりです[25]」と答えている。そして、童謡の類型をみると、まず、最初に登場した童謡に1923年9月発表された方定煥の「星の三兄弟」がある。「星の三兄弟」は、兄弟を亡くした悲しみを星に託して歌っている童謡で、「夕ぐれ空に星の三兄弟、キラキラ仲良く光っている、どうしたのか星が一つ見えなくなり、残された星が二つ涙こぼしている[26]」という歌詞である。「星の三兄弟」に始まった、死があり別れがあって、残された人が去り行きし人を思いながら悲しむという内容は、一種のパターンを築き上げるようになる。韓晶東の「タオギ」も〈死→別離→悲哀〉のパターンを辿った童謡で、苦しい現実のなかで亡くなった母親への懐かしさを歌っている。「星の三兄弟」と「タオギ」は国民的な人気を集めて幅広く歌われた。このような童謡は、尹克栄の「半月」（1924、第2巻、11号）を経て、李元寿の「故郷の春」（1926、4月号）に至るまで、「オリニ」誌初期作品の主流を成している。これらは今でも歌い継がれ朝鮮の代表的な愛唱歌となっている。

朝鮮児童文学の初期に、昔話や童話ではない童謡が隆盛したのはなぜだろうか。それは悲しみを伴う内容と「童謡」というジャンルが持っている特殊性、そして当時の文盲率の高さ[27]によるものと考えられる。悲しさと哀れみを伴う歌には、人の心を慰めて、よりどころを提供する機能が潜んでいる。また童謡のもつ波及力は速く伝達の手段として最も効率がよい。いいかえれば、朝鮮民衆の心を歌うことによって「共同体意識」を形成し、民族を一つに結びつける効果を有していたのである。したがって、子どもだけではなく〈朝

鮮民衆〉の心を〈朝鮮民衆〉を対象として造り上げている点に、この時期の「童謡」が持つ特異性が見られる。韓晶東の「その当時は時代がまさに日帝の圧迫が日々ひどくなっていった時代であり、私の心情を少しでも表現するためには童話や童謡の世界でなければ、とうてい不可能だった[28]」という発言は、このような特異性を裏付けている。

「少年」誌を代表する作品「海より少年へ」は、作者と海が一つになって朝鮮の少年に向かって作者自身の「理念」を主張していた。作者自身の理念と思想を広めることによって、少年を一つに団結させ、「我が大韓を少年の国にせよ」と、新しい国づくりを志向しているのである。一方「オリニ」誌では、「星の三兄弟」や「タオギ」のような童謡をもって、〈朝鮮民衆〉の心を歌っている。一般民衆に浸透しやすい悲しい歌は、覚えやすい童謡という形を借りて、速い波及力を見せながら広く歌われた。この童謡が伝えている「悲しい」「情感」は尚更〈朝鮮民衆〉の心を一つにつなげたと思われる。つまり、「少年」と「オリニ」に相通じている以上のような要素は、共同体を堅固にする役割を果たしたのである。

歴史的状況との相互関係の中で発生した「少年運動」が導く働きによって、「子ども」は独自的な主体性を認められた。しかし、「児童解放」論によって「児童観」が樹立されたとはいえ、「少年運動」の底流を成している日本帝国に対するレジスタンス的性格は、「児童文学」をその表出手段とする範囲から解放させることはできなかった。このような意味で、朝鮮の「児童文学」は、「ため息と悲しみを童謡から追い払おう」「寂しい子どもの心に嬉しさを与えよう、希望を与えよう」と主張する尹石重（ユン・ソクジュン）や、方定煥の児童文学を「涙主義」と非難する馬海松（マ・ヘソン）による次代の活躍を待たなければならなかった。

---

[1]李弘植『国史大事典』、知文閣、p.48
[2]李在徹『児童文学概論』、瑞文堂、1983・1、p.49
[3]引用は洪一植の『六堂研究』（日新社、1959、p.25）による。
[4]「少年」第1巻1号、新文館、1908・11、p.82
[5] 前掲書、p.2
[6] 李在徹、前掲書
[7] 朝鮮の新聞小説には漢文とハングルを混交した表記法を用いていたが、1906年からは全文がハングルとなっている小説が登場する。近い例として、「少年」誌が刊行される直前である1908年1月17日の「京郷新聞」には、全文がハングルの「イソップ物語」が連載されている。また当時の文学作品には、読者が読みやすいように漢字に読み方をつけていたが、これは日本のルビを借りたものである。
[8] 金允植『近代韓国文学研究』、一志社、1973、p.32
[9] 金正義『韓国少年運動史』、民族文化社、1992、p.272
[10] 天道教の開闢社によって創刊され、1920年6月25日から1926年8月1日までの6年2ヶ月の間、総72号を発刊した総合雑誌。
[11]「仲間へ」、『開闢』創刊号、1920・6、p.126
[12]（傍線及ぶ傍点は論者による）金小春「長幼有序の末端〈幼年男女の解放を提唱する〉」、『開闢』2号、1910・7、p.25

[13]方定煥の号。「小波」の韓国語の解釈で「小さい波」という意味。方定煥は小波、ザンムルの他にも牧星、北極星、三山人、夢中人など、20種類以上の号を使っている。(安京植『ソパ方定煥の児童教育運動と思想』、学志社、1999・4、p.27)

[14]「어린이」とは子どもを意味する朝鮮語。この言葉が朝鮮で始めて用いられたのは、1914年のことで、崔南善の雑誌「青春」の創刊号に、「어린이의 꿈(子どもの夢)」という詩がある。(安京植、前掲書、p.21)

[15](傍点は論者による)方定煥「童話を書く前に子どもを育てている大人と教師に」、「天道教月報」通巻126号、1921・2

[16](傍線は論者による)「天地人・鬼神・陰陽」、『海月神師法説』、ヘナン社、1979・8、p.145

[17]「天道教少年会主催　第一回子どもの日　宣言文」、「東亜日報」、1922・5

[18]「朝鮮少年運動協会主催　第一回「子どもの日」宣言文」「東亜日報」、1923・5、(引用は安京植の前掲書、p.94による)

[19]鄭仁燮『セクトン会運動史』、学院社、1975、p.56

[20](傍点と傍線は論者による)奏長燮「「セクトン会」と小波と「オリニ」誌」、引用は仲村修の『韓国・朝鮮児童文学評論集』(明石書店、1997)による。

[21](傍点と傍線は論者による)方定煥「少年の指導について」「天道教月報」通巻第150号、1923・3(引用は安京植、前掲書、p.220による)

[22]方定煥は、「オリニ」通巻23号(1924・11)の「「オリニ」仲間へ」にも、「虐待されながら、寂しく生きている幼い魂を救おう。このように叫びながら、我々の微力で起こしたのが少年運動である。各地に宣伝して少年会を作って、また少年問題研究会を組織する一方、雑誌「オリニ」を始めたのがこの運動のための仕事です」と述べている。

[23](傍線は論者による)「オリニ」第1巻1号、開闢社、1923・3

[24]李正錫「「オリニ」誌に現れた児童文学様相研究」、全南大学、1993・2

[25]「オリニ」第3巻6号、1925・6

[26]方定煥「星の三兄弟」(1923・9)、「日本人の中川の曲」だという説と「鄭順哲の曲」だという説があるが未確認である。

[27]1930年、朝鮮で行われた国勢調査の統計によれば、文字理解者は23.3%となり、あとの77.7%が文盲者であった。(女性の場合は文盲率92%、男性の場合は63.9%)朝鮮語禁止、高等教育抑制などの日本の愚民化政策による結果であった。姜在彦の『日本による朝鮮支配の40年』(朝日文庫、1992・9)参照。

[28]韓晶東「児童文学」、1963(引用は仲村修の前掲書による)

＊　本稿の引用全文は論者訳による